

すると なかに すこし りこしそー なの
が あごを つきだして

「それわ いわず と 去れたこと おつきさま
の ほー が たいせつ おや ないか なぜって
ゆーに おつきさま わ ちよーちんのかわり
に なるけれども おひさん わ まひるなかひ
かるのだもの』と いーました

狐きつね と 猫ねこ

ある日ひのこと 猫ねこが 一人ひとりで 山やまの中なかを 散歩さんぽ

していただきました
所ところが ばかり 途みちで 狐きつねに、出で遇あ



いきました。

で 猫ねこの方ほうでわ 狐きつねわ

大た變へんに 利り巧こうで 才さい子しで

自分自分たち よりわ ズツ

ト 世よの中なかのことに 慣な

れて いると 思おっ

いますから 平へ生だんから

しゅー敬うやまって いま

す。 それで只ただ今いまも 途みちで あいりましたもんですから

丁寧にお辭儀をしまして

「これわ 狐先生 その後わ まことに 御無沙汰

を 致しました 始終 お變りも ございませんで

今日わ どちらえ お出懸けて」

と かふーに 挨拶 を いたしますると 狐わ

グ ット 高く かまえこみ まして 頭から 足の

尖まで 猫を ジロく と 見下しながら 暫わ

返事を してやるーか やるまいかと 考へて

いきましたか やがて

「やー 誰かと 思ったら 例の鼠取かね 何だっ

て まー そんな不景氣な風をしてるのだ 一體そ

んな 風をして 我輩に 挨拶をするのゆーのが

そもく 間違ってるでわ ないか

どーだ 夫から 少しわ 何か 勉強でもしたか

一體 君わ 何が出来るのか」

えます と 猫わ して

何 と もーしまして 別に出来ることも ズッ

いませんが でも まー 一藝だけわ できまて

「フーン その一藝と ゆーのわ」

「他でも ございません 若し 犬に 追かけられ

ました時とき 樹きの上うへえ かけ上あがつて 助たすかることなの
で 汰

「なんだ それだけのことかね つまらない。 んで
ながら 我わが輩はいなどわ 藝げいといつたら。 そーさね

ー 百許ひゃくごかりもあるだろー。 それに 數かずしれぬ計畧はかりごと 狐きつねわ

袋ふくろ一杯いっぱいに持もつてゐる。 君きみなどわ 可か愛あい相さうなもんさ

まー ともかく 一いっ所しょに 來きたまえ 狩かり犬いぬから 逃に

げるあんばいなども ご覽らんに いれよー。」

こんな具合ぐあいに 狐きつねわ 自慢じまんたらぐ 猫ねこに 話はなし

てる折おりから 忽たちまち 一ひ人にんの 獵かり師しが 犬いぬを しかも



四匹まで ひっぱって
此處を 通りかゝつ
た。
それと 見るや否や
すばやき猫わ 一散に
側の樹木を 目懸けて
かけ上りまして ズツ
ト 高くえ 留って
木の葉で 丸つきり
身體を かくして 仕

舞まいまして、

「どーです 狐きつね先生せんせい 例れいの袋ふくろを お開ひらになつてわ」

と ふびかげて見みましたが可愛かあい相さうに もーこの時とき

狐きつねわ 四し匹ひきの犬いぬに捕つかまつて さんぐに 噛かまれて

苛ひどい目めに 遭あつています そこで 猫ねこわ 木きの上うへで

「おやまー 可愛かあい相さうに 百ひゃくも 藝げいがあるなんて 自じ

慢まんして 居ゐられたに 樹き木ぼくに上あることか 一ひつ 出で

來きないんだもの とーぐ あんな目めに 出で遭あつて

「お

おしまへ」